



## 多様化といわれる時代の、多様性を許さない社会心理

「最近、『多様性』を求める声が多くなってきました。私自身、多様性を求めることは良いことだと思います。しかし、本当に多様性を求めるなら、受け入れる人がいるのはもちろん、受け入れにくいという主張の人にも耳を傾けるべきではないかと思うのです。多様性を求める声が、本当の多様性を殺し、ただ他者を受け入れるか、受け入れないかという結果的で二極化した視点でしか判断しなくなっているのです。すべての人が自分と違うものを無条件に受け入れられなければいけない社会は、本当に多様化した社会といえるのでしょうか。これは、受け入れない人を擁護しているのではなく、人が互いに寄り添い合い、それぞれの意見を一方的・感情的になることなく交わす必要があるのではないかという意味です。日本全体、もちろん自分自身も、自分以外の考え方を理解し、そこに共通性を見出して寄り添うという能力がなくなっている、もしくは、考えることを放棄する傾向が強くなっている。しかし、この授業を通して……」。

これは、ある学生の「建学の精神」のレポートの抜粋です。多様化といわれる時代の、多様性を許さない社会心理によって社会が萎縮し、活力を失い、<sup>ぎ</sup>瘦せ細っていくようにさえ見える近頃の不寛容な世相について、若い人もそんなことを考えているのかと、この学生とは「一体何がそうさせるのだろう」といった議論になったのですが、最近報道で「エコ・テロリズム」という事件が頻発していることを聴いて、これには本当にビックリしました。「自然の尊重・環境の保護」を大義名分に、「絵画と地球の人々の命を守ることと、どちらが大切なのか」と、そのデモンストレーションとして、ちょうどピストルで人の体に穴を空けるように、世界の名画にトマトソースやマッシュポテトを投げつける、はたまた接着剤を塗りつける。私には自然を大切にする主張と絵画を破壊する行為がどのように結びつくのかよく解らないのですが、パリのルーブル美術館ではダ・ヴィンチの「モナ・リザ」が、ロンドンのナショナル・ギャラリーではゴッホの「ひまわり」が、フィレンツェのウフィツィ美術館ではボッティチエッリの「春」が襲われたそうです。

自分の善しとするものはどこまでも押し通し、意に反したものは決して許さない、しかも徒党を組むに従い増幅するこうした歪んだ精神が<sup>ひ</sup>巻き起こす事件を知らされて、かつて一時代を<sup>せ</sup>席捲した二つの政治思想のことを思い出しました。一つは、自分達の理想を妄信し、歴史をその理想を実現するための実験場と見做し、多くの人々が過去から伝えてきた歴史を自分達エリートが未来に向かって計画する理想に照らしてことごとく洗<sup>クレンジング</sup>浄しようとする、かつてロシアにあったコミニズムという政治思想のことです。もう一つは、自分達が信奉する価値観からユダヤ人という特定の民族を<sup>クリスタルナハト</sup>邪悪視し、「結晶の夜」などという不気味

な合言葉を用いて異物として摺りつぶし、同じ価値観を共有する者だけで美しく結晶化しようという、かつてドイツにあったナチズムという政治思想のことです。この二つの政治思想は、左と右と激しく敵対しましたが、正統と異端を苛烈に峻別し、党派を組んで自分達の理想や正義を信仰する擬似宗教性を持つという点で同質のものでした。歴史の動向を展望する洞察力を失ってはなりません、必ずや多様性を殺してしまう「理想主義者の独断」ほど世に恐ろしいものはありません。

「人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。やはり向う三軒両隣にちらちらするただの人である。ただの人が作った人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国へ行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりもなお住みにくかろう。越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容で、束の間の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ」。そこには、肩肘張った理想の主張も、自分だけが神を背負った正義の論理もありはしない、他人様と折り合いながら、何とか少しでもよりよい社会を作っていこうと、名作『草枕』の中で主人公にこう語らせたのは、夏目漱石でした。

※正式には「帝国結晶の夜」と呼ばれ、1938年11月9日から翌未明にかけ、ドイツ各地で起こった反ユダヤ主義の管制暴動のこと。なお、世間に流布している「水晶の夜」という訳語は、誤訳。

[>前のページへ戻る](#)